

「幕府の運命・日本の運命
小栗上野介の日本の改造」
村上泰賢住職の講演をきいて
私が考えたことをまとめました



2026年3月21日 境町総合文化センター
内田陽子

世界1周をした使節1860年

- 歓迎会では大統領も同じフロアにおり、女性も参加
→アメリカはすでに平等の意識
- 国旗をかかげる際に船の旗（日の丸）をかかげる
→日本はまだ藩レベル。国家という自覚は乏しかった
- 国書を届けるだけでなく、アメリカの文明開化・産業などを見学・学習
→留学で何を学んでくるかが、自国の発展にかかわる
- 「彼らは財布をはたいてアメリカの無数なものを購入したが、真似され、改良され、わが国に帰るだろう」
→日本人の賢さをアメリカ人は見抜いていた

帰国したときの行動から学んだ点

- 帰国した時、攘夷運動が活発で渡米見聞を語れない状況
しかし、小栗はアメリカ文化を論じ、横須賀造船所の建設を進めた
→留学しても、勇気をもって行動を起こさないとはじまらない
- 造船所は単なる船をつくるところではない、産業革命を起こす大総合工場である（あらゆる鉄製品、帆、木工、大砲、ドックなど蒸気のエネルギー活用）加えて人材づくり
→群馬大学も理工学・医学・保健学（看護学含む）、教育学、情報学など大総合機関。あらゆるものをつくりだし、優秀な人材教育に励む
- 近代経営の方式定着（複式簿記など）、個人経営でなく、資本を募り、利益が出たら、還元して経営を安定するカンパニーの考え方
→大学も研究費を稼ぎ、学生や国民、生産者に利益を還元するしくみが重要